

蔵内邸・天徳寺・城井の上城趾・

御所ヶ谷神籠石・福岡城

（宇都宮・黒田一族の史跡を巡る）

平成二十六年NHK大河ドラマ「軍師官兵衛」が全国に放映され、大分県・福岡県の各地でイベントがありました。史談会でもこれに乗り一泊研修を企画しましたが、台風接近等により二十七年に延期されました。

十一月五日八時半、佐伯市振興局前を出発。一路福岡県築上郡に向かいました。参加者は一四名。

今回の訪問地は筑豊の炭坑王と呼ばれた蔵内次郎作の住居跡『蔵内邸』、ドラマの中で黒田長政に滅ぼされた宇都宮一族の菩提寺『天徳寺』、宇都宮氏の居城跡『城井の上城趾』、古代の山城跡『御所ヶ谷の神籠石』。翌六日には福岡市博物館で公開されている古代遺跡

『奴国展』の見学、最後に黒田一族の『福岡城』と『菩提寺崇福寺』です。

車中、佐伯梅牟礼城主佐伯氏の一族、大神宗久の墓が博多駅付近にある事や宗像大社の建築に係わる出光興産社長の話を聞き、高速道路建設で問題になった^{かんた}苧田のミカン園強制撤去の現場を横目に築城町へ向かいました。

一、蔵内邸



旧蔵内邸は平成二十七年三月国の名勝（国登録文化財・県指定建造物）に指定されました。

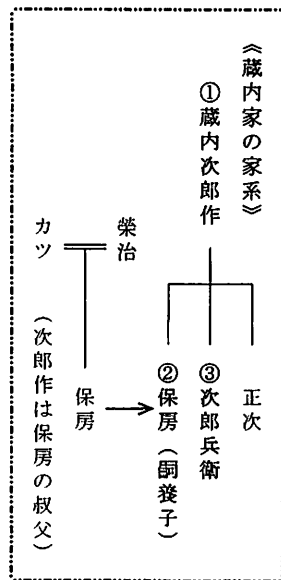
この建物は日本の近代産業を支えた炭坑主住宅の一つで当時の様子を知る事が出来る建物です。

炭坑主の住宅は、現在、筑豊御三家と言われた麻生太吉邸(飯塚市・本家、大浦荘)、安川敬一郎邸・松本健次郎邸(飯塚市・西日本工業倶楽部)、貝塚嘉蔵邸(宮若市)、貝塚健次郎邸(福岡市・友泉亭公園)、伊藤傳右衛門邸(飯塚市)、高取伊好邸(唐津市)、掘三太郎邸(直方・直方歳時館)とこの蔵内邸が残されています。

これらの炭坑主は明治二年二月に太政官布告『鉱山解放令』により炭坑に着手、採掘により多大の富を築いた人々です。『鉱山解放令』には「鉱山開拓之儀ハ、其地居住之者共、散障無之候ハハ、其支配之府藩県へ願之上、掘出不苦候、府藩県ニ於テモ旧習ニ不泥、遠ニ差許可申事」と記されており、意味は「鉱山開拓の儀は、其の地に居住し差し障りがない場合、その土地を支配する府藩県に願いを出し許可を受ければ、旧習に關係なく自由に炭坑を開く事が出来る」というものです。

蔵内家は、中世豊前国を治めた宇都宮氏の家臣で蔵内若狭守と呼ばれており、宇都宮家滅亡の後、江戸時代に帰農し地元(庄屋)として成長した家です。

蔵内次郎作は筑豊の炭坑王貝島太蔵を支援していた親戚の久良知重敏・政市親子を頼り、明治十八年田川郡後藤寺の「崩れ」炭坑で採掘を始め成功。その後、峰地炭坑(添田町)、大峰炭坑(大任町・川崎町)、足立炭坑(北九州市)、京殿坑(水巻町)などと規模を拡大していきます。大正四年、次郎作は小倉鉄道を添田まで開通させ、翌五年には蔵内鉱業株式会社を設立、保房を社長に就任させ、大正八年には全国六位の産出高をあげるまでに繁栄しました。



旧蔵内邸は蔵内次郎作・保房・次郎兵衛本家三代の住宅で、明治三十八年から大正にかけて出身地の築上町上深野(旧城井村上深野)に建てられたものです。明治三十八年頃に主屋と応接間、庭園がつくられ、大



蔵内邸の中庭・回遊式庭園

正五年から宝蔵・炊事棟・座敷棟・大広間・茶室・大玄関棟の順に池庭に面して増築していき同九年に完成しました。

住宅の延床面積は約一二三二平方メートル。敷地は約七二三五平方メートルにも及び、隣接する貴船神社神殿、参道や石橋も同時に造られました。建物の中でも十八畳間が二室続く大広間(高さ三、四メートル、金砂子の壁)や三十畳の大玄関間(土間を含む)は炭鉱主の住宅では最大です。柱材は廊下に台湾檜、茶室には俵紋り、鈴蘭檜、仏間には黒柿、居間には鉄刀木、黒檀、紫檀などの木がふんだんに使われ、天井も弓形・舟形・格天井と趣向をこらし屋久杉が使われています。各部屋には繊細な細工が施された欄間、照明器具、襖の引手など細部に至るまで手の込んだ技巧が施され、仏間の壁紙には金唐草紙きんからかわしという西洋の装飾工芸を和紙で摸した貴重な壁紙が使われています。大正期増築の棟梁は山田村四郎丸(豊前市)出身の中江九壽くひろで地方大工棟梁の高い技量がうかがえます。

二代目保房は蔵内鉱業の運営の他、田川中学・築上中学の創立、宇島鉄道の開発も行いました。三代目次

郎兵衛は炭坑労働者の供養のため、高崎山の土地七万坪を万寿寺別院に寄進しています。また大分の尾平鉾山、長崎の大串金山の経営も行っています。

二、天徳寺・宇都宮家の菩提寺



この月光山天徳寺は、文治元年（一一八五）初代宇都宮信房公が豊前守護職として下総国よりこの地に入国後百五十年、南北朝の対立で一族が二派に別れ戦う情勢となり、これを憂いた五代頼房公が天慶年間に祈願建立した寺です。その後二百数十年宇都宮一族も時勢に応じ本拠城井谷の護りを堅め、東西の峰々に城を築き山を縫って騎馬道を作り城塞を構えます。この天徳寺を中心に難攻不落の城「萱切城」城井甄筆城」が築かれ本城としました。

天正十六年（一五八八）春、豊前入国の黒田長政の治世と従来の土地を死守しようとする宇都宮鎮房が対立、伊豫移封を潔しとしない十八代宇都宮鎮房は中津城で謀殺され、息子の朝房は加藤清正に討ち取られます。これにより四百年にわたる宇都宮氏の統治が終りました。

この天徳寺境内には鎮房、朝房等三代のお墓と多くの五輪塔が残されています。

私たちは、この宇都宮一族のお墓にお参りし、さらに奥の城井ノ上城跡に向かいました。宇都宮一族の終焉の地は天徳寺のある萱切の奥寒田の大平城跡です。

城井ノ上城は城井谷の最奥「三丁の弓の岩」にあります。

三、城井ノ上城きいのこじょう

この城井ノ上城跡は、中世から近世に移り変わる時期の城塞で城井谷の最奥にあります。築上町役場から城井川沿いに二四キロメートル程奥にあります。

北登山道を登ると道は次第に傾斜し急な坂道となつてきます。大きな岩の入り口をよじ登りますと、城井ノ上城の城内になります。この岩の割れ目が城の表門となっています。周りはこのような岩で囲まれています。



ます。

この表門を潜り更に三〇〇メートル程登ると杉の木に囲まれた広場に辿り着きます。ここが城趾です。



この広場の先は再び細くなり二つの大岩に囲まれた裏門に辿り着きます。天然の岩を利用した城塞と言う事になります。

四、御所ヶ谷神籠石

私たちは再び行橋市に戻り、行橋市西南部と京都郡勝山町境に広がる『御所ヶ谷』に向かいました。この御所ヶ谷には『神籠石』と呼ばれる石門があります。神籠石は久留米の高良山の列石にならって作られた遺蹟名です。発掘調査により列石を基礎とした城壁（土塁）で囲まれた古代の山城であることが分かりました。調査から七世紀後半に作られたものと考えられています。「御所ヶ谷城」「神籠石系山城」とも呼ばれます。

この地が「御所ヶ谷」と名づけられたのは、『太宰府所管の鎮城にして、続日本紀に見ゆ。土俗馬岳を宰府の抱城と呼び、其下に御所谷の古蹟あり。鎮所則此ならん』（大日本地名辞書）、『景行天皇の行宮の跡』（豊前志）によるものです。

その景行天皇の長峽の行宮の跡とされているのは

神籠石の中門から一町四〇間（一八〇メートル）南に東西二〇間、南北一町の平地があり、そこに柱間三間×四間の総柱礎石群が見られる。今この附近には景行神社が鎮座している。



御所ヶ谷神籠石中門附近



景行神社裏手にある東西棟、総柱礎石群（180メートル上）

この神籠石系山城は標高二四六、九メートルのホトギ山から西に延びる尾根の北斜面に広がる遺蹟で、東門（第一・第二）、西門（第一・第二）、中門、南門（第一・第二）の七つの門を持つ花崗岩を積み重ねた約三キロメートルの城壁です。ホトギ山周辺を除く二キロメートルの範囲には版築工法はんちくで作られた三〜五メートルの土塁が張り巡らされています。

当時は白村江の戦いに敗れた直後であり唐・新羅軍の侵略を防ぐために作られた水城・大野城（太宰府）、基肄城（基山町）、金田城（対馬）などの国土防衛の為に造られた山城と同じものと考えられます。

五、奴国展〜福岡市博物館にて〜

二日目は福岡市博物館で行われていた『奴国展』の鑑賞から始まりました。

奴国は一世紀から三世紀に掛けて『後漢書』『東夷伝』『魏志倭人伝』にあらわれる倭人の国で、今の福岡市春日市付近にあった国と考えられています。

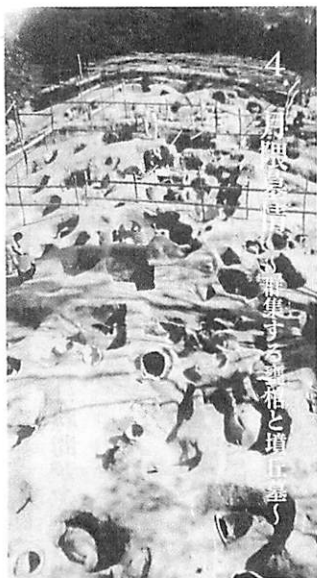
明治三十二年（一八七九）からの須玖・岡本遺蹟発掘調査により甕棺墓、木簡墓、土壙墓など三〇〇の墓

と銅矛^{ほこ}五、銅劍二、銅戈^{どうか}一、前漢鏡、勾玉、ガラス璧、ガラス管玉などが多数発見されました。これらの展示物が館内に展示されています。圧巻だったのは、これらの遺物を参考にして造られた『奴国八景』でした。

《奴国八景》……実際の発掘をもとにして構成。

- ①瑞穂城市ー前一世紀に作られた南北二〇〇〇メートル東西七〇〇メートル、面積一三〇ヘクタールの城市と幅五メートル、深さ二メートル、長さ九〇〇メートルのクランク状運河の再現(比恵・那珂遺跡群)

- ②那珂直道ー一、五キロメートル、幅七メートルの直道側溝幅深さとも六〇センチ(那珂遺跡群)



奴国八景一月隈墓情

- ③比恵清水ー五〇〇基以上の井戸。台地状の所にある。深さ五メートルの断面(比恵遺跡群)

- ④月隈墓情ー男女の人骨復元。男子一六二、七センチ、女子一五一、三センチ。乳幼児死亡率高く、平均寿命四〇歳前後。老衰化は六〇歳。

(金隈遺蹟・月隈丘陵の甕棺墓地群)

- ⑤板付秋穂ー板付遺跡の灌漑水路技術・井堰の紹介。一〇メートル程の水路に上下二段の井桁^{いげた}あり。

(比恵遺蹟・下月隈遺蹟・雀居遺蹟など)

- ⑥須玖青炎ーテクノポリスの風景。青銅器の工房跡、生産工程を再現。青銅器の出現(須玖・岡本遺蹟群)

- ⑦安德奉矛ーどうやって祭りをしていたか? 祭りの形イ、銅矛を始めとした祀り: 銅鐸・銅戈

口、祭りを演出する琴。
ハ、儀礼としての鋤入祭ー開拓のため、銅製の鋤を使って鋤入れする。

現在の地鎮祭。(板付遺跡・那珂遺蹟)

- ⑧博多帰帆ー対外交易と海人

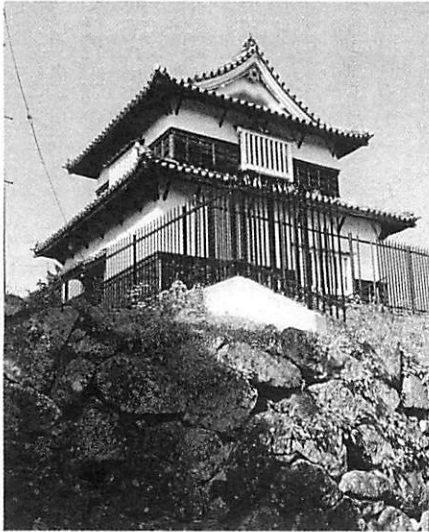
丸木船と準構造船の建造

中国銭(半両銭・貨銭・五銖銭) トンボ玉の輸入

このように当時の様子を発掘された遺跡群で構成していたので、二時間余の見学では時間が少なかつた感じがしました。

六、福岡城

福岡城は、豊前中津城の藩主であった黒田如水・長政が福岡に転封になり築いた城です。現在は大濠公園おほりの名の方が有名になっています。



潮見櫓楼門

私たちは、まず黒田如水の隠居所のあった場所を訪

問三の丸から二の丸、本丸、天守と歩を進めた。

黒田節の話の原点、母利もつり太兵衛の長屋門や潮見櫓門、三の丸から東御門、祈念櫓を経て二の丸、本丸、天守台跡、多門櫓と見学しました。

福岡城は慶長六年（一六〇一）に築城を開始しています。筑前に前年の慶長五年十二月十一日に入部した黒田長政は、秀吉が九州平定を行った後に小早川隆景によって建造された『名鳥城』に入城しています。

しかし、この名鳥城は三方を海に囲まれ要害としては良かつたのですが城下町を展開させるのに十分な土地がなかつたそうです。そのため博多湾岸の丘陵地福岡の地に普請されました。福岡城は慶長十一年まで七年間の歳月を要して造られました。

福岡城は昭和三十二年八月に国の史跡に認定されました。平成十五年黒田長政福岡城築城四百年にあたり、福岡城・舞鶴公園と大濠公園を結びつけたセントラル構想が示され推進されています。平成一二年に焼失した下之橋御門の復元が一八年から開始され二〇年に完成しました。総面積二五万平方メートル、内堀の周囲が五〇〇メートルに及ぶ広大なものです。

三の丸から二の丸へ



多門櫓



福岡城の広大な城内の圧倒的な姿を見、当時の様子を心に描きながら、次の訪問地「崇福寺」に向かいました。

七、黒田家の墓地「崇福寺」

崇福寺は福岡城を築いた黒田如水・長政等の黒田家の菩提寺です。広々とした敷地に歴代のお墓がその姿を見せています。この崇福寺の一角に名島城の唐門が移築されています。崇福寺の山門も福岡城から移築

されたものです。当時の福岡藩の姿を想像できます。黒田家の菩提寺である崇福寺は、今年より管轄が変わり市の教育委員会の許可が必要で、内部まで訪問することが出来ませんでした。

左端の傘状のお墓が黒田如水のもので、二年越しの視察旅行でしたが、古代から中世、近世の姿をじっくりと見させていただいた二日間でした。

